

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 12 NO. 1

(通巻45号)

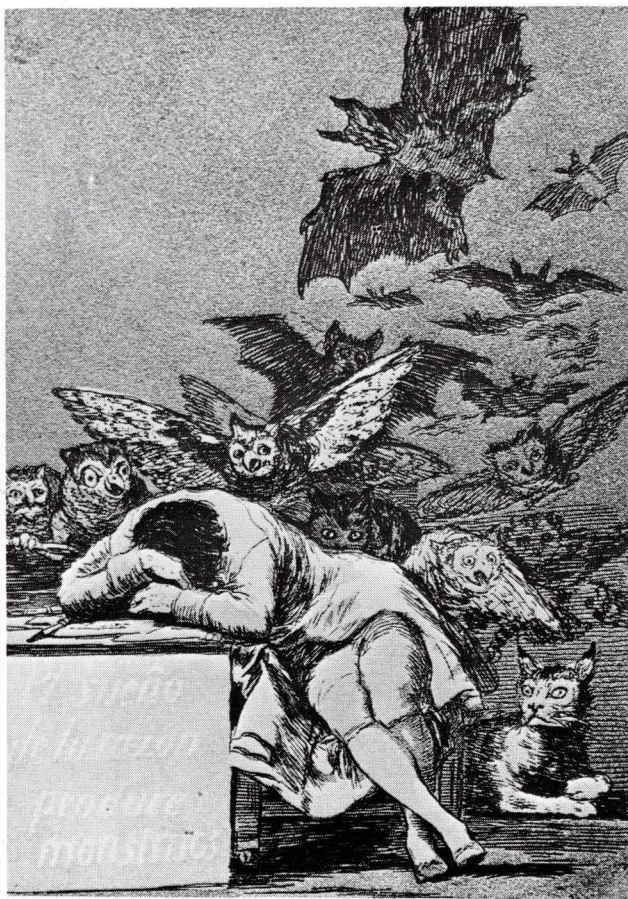
昭和60年5月1日発行

編集・発行人 平野 馨

〒260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8311 (代表)



ゴヤ

ロス・カプリチオス

〈氣まぐれ〉より

No. 43

「理性の眠りは怪物を生む」

一七九七年頃 エッチング・アクワティント

この作品は、ゴヤの最初の連作版画集『氣まぐれ』の第43番目に入っている。しかし、はじめは『氣まぐれ』の前身

ともいえる未出版の版画集『夢』の扉絵となるものであった。

うつぶせになっている人物はゴヤ自身である。ゴヤは人間の理性を重んじる啓蒙主義を信奉する友人を多く持ち、彼自身もまた啓蒙主義者であった。しかし、今彼は眠っている。理性の鋭い監視の眼に抑えられていた様々な本能や欲望はいつきよに解放され、それらはこうもりや山猫やふくろうという姿になって、彼を取り囲んでいる。彼らは、まさしく無意識という闇の世界から現われたのである。全聾となり孤独と闘いながら人間の内面を見つめ、その奥深くにひそむ無意識の世界の所在をゴヤは明らかにした。

最初の連作版画集『氣まぐれ』はそこから生みだされたものであろう。スペイン社会の無意識の世界、未知や偽りや偏見を理性により冷静に観察し、告発しようとしたゴヤは、この作品に次のような解説をつけている。

『理性に見放された幻想はとうとう怪物を生む。理性に結ばれたそれは、あらゆる芸術の母となり、驚くべきものを生み出す。』

みる (展覧会)

特別展

スペインの光と影

ゴヤ連作全版画展

'85.5.17(金)~6.16(日)

——「気まぐれ」「戦争の惨禍」「闘牛技」「妄」——

一

スペインが生んだ大画家フランシスコ・ゴヤ・イ・ルシエンテス(一七四六—一八二八)の八二年の生涯は激動するヨーロッパの近代化とともにあった。むしろスペインは当時のヨーロッパでは中世以来の悪習や偏見が根強く残っており、支配階級の墮落は眼に余るものがあった。ゴヤの諷刺の主題が、女性のふるまい方にはじまる風俗批判、国家と社会の指導者たちへの政治批判、そして、最も力点を入れて教会の暴虐への宗教批判

四大連作



彼女たちは、もつ席を持っている
(版画集「気まぐれ」No.26)

と連なるのも、すべて、事実上彼の五十歳以後にあたる。彼がまだ宮廷首席画家として活躍した一七九五年までは、温和なもので、一八世紀末の伝統の中に従っていた。ゴヤがこうした社会悪を諷刺した背景には、スペインの指導的な啓蒙主義者たち、例えば文学者で法務大臣にもなったホベリアーノスなど知識人との親交があった。そしてゴヤは、宮廷人らの肖像画もよく描いたがそれは宮廷衣裳に包まれた愚鈍さを見事に表現していた。例えば一七九九年十二月に宮廷首席画家に任命された初仕事で、有名な「カルロス4世の家族」などもゴヤの筆力、残酷なまでにモデルに迫り、内面をえぐり出している。これらの絵が当時受入れられたということは、国王や王妃自身の批判能力のない尊大さや取りすました態度の証明でもある。

二

同じ宮廷画家でも、ゴヤが心の師と仰いだベラスケスは妻や友人である国王フェリッポ4世の愛護に包まれて、宮廷内のアトリエでひたすら絵画に没頭できた幸福な画家であった。ゴヤの場合、個人的



ゴヤ(1746~1828)

にも社会的にも生活は決して平穏なものでなかった。

ゴヤの後半生の第一の事件は、一七九二年に重病になったことだ。やがて、健康は回復したものの全聾となり、強迫観念に悩まされ、ペシミステイックに陥った。

この大病から七年後の一七九九年に自画像を含む八〇点のシリーズ版画『気まぐれ』

が制作された。ゴヤの最初の版画集である。

第二の事件は、スペインの政治的・社会的破局である。一七八九年のフランス革命とその後、ナポレオンの軍隊による侵入、首都マドリードの蹂躪と急激な社会変動が彼に介入した。この一八〇八年のフランス軍の侵入とそれに続くスペイン民衆による独立戦争、有名な「五月二日」の民衆蜂起と翌「五月三日」のフランス軍の残酷な報復事件をゴヤはマドリードに留り目撃した。ゴヤは事件に触発され手元にあってもすぐ使える銅板に向い、版画集の『戦争の惨禍』の制作に着手したと伝えられている。しかし、この版画集の制作は一時中絶し、その間に『闘牛技』(一八一六年)をはさんで、ようやく一八二〇年に八二点のシリーズが完成した。結局ゴヤの生前には出版はされず、初版が刷られたのは一八六三年のことであった。この『戦争の惨禍』のシリーズは三部構成で、

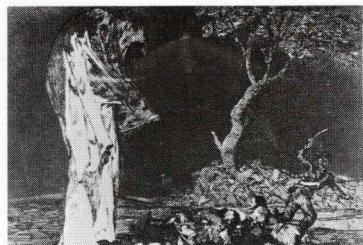
「速水御舟とその時代」

——静かな感動呼ぶ——

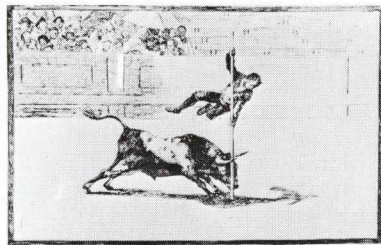
60年1月19日から2月27日まで開かれた本展は、冬季にもかかわらず予想以上の来館者があり、しり上がりの反響を呼んだ。期間中、御舟のいどこにあたる日本美術院同人の吉田善彦氏も駆け付けた。

吉田氏は、十八歳の時から御舟の没する二十四歳の時まで親しく指導を受けた。「絵のゆき方から人生の生き方まで先生の恩恵を被っている」と語りながら、古典の学習と写実の追求に徹した作品を前に、「日本画の厳しい伝統を踏まえた、最高の近代的表現」と、感動の時を過され、去り難い面持ちがうかがわれた。

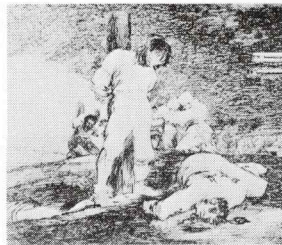




恐怖の夜
(版画集「夜」No.2)



マドリッド闘牛場でファニート・アビニャーニ
が見せた敏捷さと大胆さ(版画集「闘牛技」No.20)



もう助かる道はない
版画集「戦争の惨禍」No.15)

第一部(二〜四七図)は、戦争の残虐さ、悲惨さ、不条理を描き、第二部(四八〜六四図)は、戦争の際にマドリッドで起きた飢饉の惨状、第三部(六五〜八二図)では戦後の為政者への失望と批判を「強調されたカプリチョ」と題して描いた。

一八一六年に出版された『闘牛技』は『戦争の惨禍』の制作と並行して制作された三三三のシリーズで牛のダイナミックな動きをとらえた作品集。

『妄』は、一八一五年から一八二四年にかけて制作された二八二点(後に四点を加えて三二六点)からなる。妄は「メチャクチャ」とか「ひどいなあ」の意味だそう。『氣まぐれ』や『戦争の惨禍』よりもさらに厳しい専制政治の復活下で身の危険もあり批判や諷刺が難しい表現となっているようだが、作品集の真相は不明な点が多い。

三

ゴヤは、生涯を通じ二六九点の銅版画と晩年二二点の石版画を制作した。今回の連作四大シリーズは総て銅版画二二四点で構成し展覧するのでゴヤの版画芸術の全貌を鑑賞できる絶好の機会である。銅

版画二六九点のうち、ゴヤの生存中に刷られたものは半数以下の二三〇点にすぎない。事実は、その制作がいかに政治的危険と背中合わせであったかの証拠であろう。

ゴヤの銅版画は、エッチングと共に松脂によるアクワティントという当時比較的新しい技法を導入し、この二つの技法を基本とする複合効果を示す独創的な仕事で高い評価を得ている。画面上からは、背景にアクワティントを用い、人物にはエッチングを適用し、いくつかの作品ではさらにピュラン彫りとカドライイボイント技法も加味している。ゴヤは、スペイン美術史唯一の版画家だともいわれている。

四

ゴヤの芸術はフランス革命の生んだ「革命の芸術」と呼ばれ、時代の苦難をよく表現している。一人の作家の芸術の中に国民生活がよく体现されていると思う。この事自体がゴヤ以前に前例のないことであった。フランス革命の精神が芸術に与えた影響の中で音楽ではベートーベンの作品に、絵画ではゴヤの作品に表われたことは、この革命の影響が全世界的なものであつたことの証しでもある。なお二人が聳者であったことも偶然とは言えない不思議な共通点だと思う。ヨーロッパにおける近代社会の出発点は、産業革命やフランス革命に源流を求めるが、では、近代絵画の出発点をどこにおくかはいろんな見解がある。だが今日、ゴヤが技術的にも主題的にも古典的規範から近代性への移行を告げる道を開拓した画家であり、多様な近代美術思想を準備し、強力な橋渡しの役割を果たしたことは多くの人が認めるところである。今回の展覧は、近代絵画のルーツを考える機会としての意味もある。時代と民族をこえたゴヤとの心の交流を期待したい。

●美術講演会

日時・場所

五月二六日(日)午後二時から
美術館講堂にて
演題 「ゴヤ―版画の世界」
講師 牛玖健治氏(版画家)

●第一回美術を語る会

日時・場所

六月八日(土)午後二時から
美術館研修室にて
話題提供者 鶴岡洋氏(版画家)
話題 「ゴヤと銅版画の技法」

第一回日本現代具象彫刻展

―初の試み成功―

2月2日から24日まで開かれた本展は、隔年開催のビエンナーレ方式の第一回展であるが、全国から104点の力作が寄せられ、次回に向けて明るい見通しができた。

2日、オープニング・受賞式の審査講評の中で、審査員本間正義氏は、「長らく冷飯を食ってきた具象彫刻が近年再び脚光を浴びてきており、新しい具象作家が育ちつつある。今回の審査を通して見ても、実に多彩な表現が見られ、現代美術の多様性を如実に表わしており、大いに今後の可能性を感じた」と述べられ、本展の投じた一石に大いに注目されていた。



昭和60年度 常設 収蔵作品展Ⅰ期

4/25
8/18

60年度事業案内 ①

収蔵作品展Ⅰ期

第三室

○浅井忠とその周辺

昭和五十九年度基金取得作品である浅井忠の油彩画、水彩画、日本画作品の他資料類と、浅井忠と共に京都高等工芸学校で後進の指導に尽した牧野克次の作品を展示。

○水彩画の流れ

明治後期より水彩画家として日本における水彩画の普及につとめた大下藤次郎、三宅克己、現在水彩連盟他で活躍している荒谷直之介、三橋兄弟治の作品を展示。

○房総のゆかりの美術家

主な作家をあげると日本画では石井林響、田岡春径、横尾芳月、時田直善、若木山、洋画では都島英喜、工芸では津田信夫、彫塑では安西順一、堀豊之、山崎英五、書では、浅見喜舟、福田襄州の作品を展示。会期中展示替えを行います。

特別展「ゴヤ連作全版画展」

会期 5月17日～6月16日

内容 別掲

特別展「フランス名画展」

会期 8月23日～9月16日

内容 詳細次号

常設収蔵作品展

会期Ⅰ 4月2日～8月18日

Ⅱ 9月21日～10月13日

Ⅲ 12月13日～3月30日

内容Ⅰ 別掲Ⅱ・Ⅲ次号

今関啓司展—房総の美術家シリーズ(15)

会期 9月19日～10月13日

内容 今関啓司(一八九三～一九四六)は、長南町に生まれ、春陽会で活躍。油彩作品を中心に展覧する。

第九回千葉県移動美術館

会期① 八千代市文化センターホール

9月11日～9月23日

② 君津市役所大ホール

9月26日～10月15日

本館収蔵作品の鑑賞の機会を広く県民に拡大し、地域文化の振興に寄与するため県内2か所で行う。

画、彫塑、工芸、書の五つの分野から展示します。

第一、第二展示室

○日本画

石井柏亭の祖父にあたる幕末から明治にかけての南画家鈴木鷺湖、帝展、文展で活躍し、異色の画家として知られる石井林響、今村紫紅と目黒赤曜会を結成し、また、院展で活躍した富取風堂、川端画学校に学び、昭和初期に房総の美術界に大きな役割を果たした鈴木月潭他、東山魁夷、立石春美、秋葉長生、若木山、渡辺学、岩崎巴人、関主税、松尾敏男の作品を展示。会期中は展示替えを行います。

○洋画

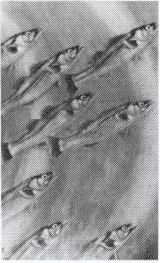
浅井忠をはじめとして、工部美術学校でサン・ジョバンニに学び、曾山幸彦らと画学専門学校を設立、また、大幸館で後進の育成に尽した堀江正章、岸田劉生に師事し、草土社、春陽会等で活躍した椿貞雄、渡欧し、サロン・ドートンヌ等に出品、帰国後も独自の面風を追求した原勝郎他、石橋武治、浅井真、板倉鼎の作品を展示。

○工芸

古典に基礎を置いた格調高い作品を残した香取秀真、欧米諸国の工芸を紹介し、新傾向の作品を発表した津田信夫という近代工芸界のみならず日本の近代工芸界をリードした二人の鍍金作家の他、香取正彦、信田洋、鈴木治平ら現在も活躍する金工作家の作品を展示。

○版画

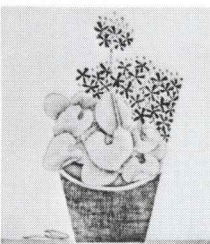
メゾチントによる美の世界を創りあげ、現在銅版画の第一人者である浜口陽三、独自の方法で木版画に繊細な味わいを出した星襄一、様々な銅版画の技法を駆使し、色彩感覚豊かな作品を発表している深沢幸雄ら、国際的な展覧会で活躍し評価の高い三人の作品を展示。会期中展示替えを行います。



富取風堂「群魚」



香取正彦
「鍍銀玉鍍花瓶」



浜口陽三「草花」

新収蔵作品紹介

(XII)

昨年度収蔵された作品は次の通りです

購入

若木山作^{みすず}「三篇刈る信濃の女」
(紙・着彩)

石井林響作「梅花書屋」(絹・淡彩) 他二点

時田直善作「魚紋」(紙・着彩)

大下藤次郎作「紫陽花」(紙・水彩) 他二点

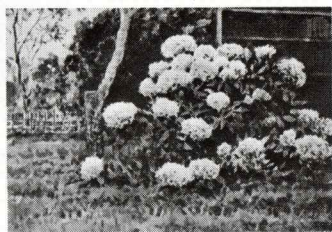
三宅克己作「小諸城址」(紙・水彩)

荒谷直之介作「若い裸婦たち」
(キャンバス・水彩)

安西順一^{キヤンバス}作「秋晴」(木)

堀豊之作「姉妹」(ブロンズ)

青木三四郎作「憩い」(石)



大下藤次郎「紫陽花」



石井林響「木華開耶姫」

寄贈

次の資料が寄贈されました。
ここに厚くお礼申し上げます。

田中路人氏より

田中路人作「豊漁」(紙・着彩)

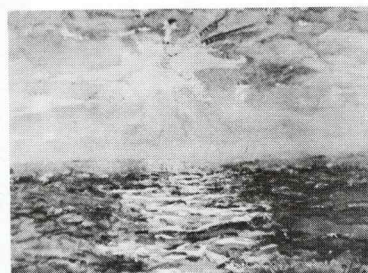
道守きのい氏より

若木山作「島ノ椿」(紙・着彩)

他一点

西宗忠之氏より

石井林響作「木華開耶姫」(絹・着彩)



浅井 忠「洋上の夕陽」

時田直善氏より

時田直善作「夕風」(紙・着彩)

兼巻洋子氏より

浅井忠作「草を摘む女たち」
(紙・着彩) 他八十六点

池辺義路氏より

浅井忠作「パリ公園」(紙・鉛筆淡彩) 他一点

榊原一彦氏より

牧野克次作「松林」(紙・水彩)

浅井忠作「茶托」(陶芸)

都鳥成一氏より

都鳥英喜作「舟小屋」(キャンバス・油彩) 他二点

荒谷直之介氏より

荒谷直之介作「大島風景」(紙・水彩) 他三点

浅見政美氏より

浅見喜舟作「木戸公之詩」(紙・墨) 他十一点

日下部鳴鶴作「不背」(紙・墨) 他十一点

長三洲他作「明治文人墨客寄書」

昭和五十九年度 取得基金購入資料

浅井忠作

「溪流」(紙・鉛筆淡彩)

「曳船通り」(紙・ペン)

「フォンテンブローの夕景」
(板・油彩)

「洋上の夕陽」(紙・水彩)

「母の肖像」(紙・油彩)

「松」(紙・墨)

「梅」(紙・墨)

「欧州風景」(絹・墨)

「盗賊」(絹・着彩)

「祖浅巻物」(紙・墨)

「当世風俗五十番歌合(二番)」
(紙・着彩)

「当世風俗五十番歌合(七番)」
(紙・着彩)

「ごあんない・団体展」

- 第30回二科千葉支部展
5月8日～5月12日
- 二紀会千葉県支部展
5月8日～5月12日
- 第16回表展
5月14日～5月19日
- 千葉市アマチュア美術展
5月14日～5月19日
- デンマーク手作りじゅうたん展示会
5月21日～5月26日
- 富士美術展
5月28日～6月2日
- 第12回千虹日本画会展
5月28日～6月2日
- 第8回一陽会千葉展
6月4日～6月9日
- 第11回貌展
6月4日～6月9日
- 第10回関東全展(絵画展覧会)
6月11日～6月16日
- 千葉県書道協会展
6月18日～6月23日
- 日本画秀峰会展
6月18日～6月30日
- 秋耕会千葉支部展
6月25日～6月30日
- 第8回精鋭展
6月25日～7月7日
- 第3回(明日を拓く)教育美術展
7月2日～7月7日

かたる・つくる

(美術を語る会・実技講座等)

日本画入門講座

期日 5月30・31日
6月6・7日
7月3・5日

講師 宮沢一雅氏
定員 25名

洋画研修講座(1)

期日 6月4・5日
11・12日

講師 篠崎輝夫氏
定員 30名

洋画入門講座(1)

期日 6月15・16日
22・23日・29

講師 太田洋三氏
定員 30名

陶芸入門講座

期日 6月25・27日
7月16・23日

講師 清野一郎氏
定員 30名

てん刻入門講座

期日 6月11日

期日 7月11・12日
18日 (3日間)

講師 霊園鴻甫氏
定員 30名

デッサン入門講座(1)

期日 7月24・25日

講師 羽生智樹氏
定員 30名

版画入門講座

期日 8月上旬

講師 平野正房氏
定員 30名

デッサン入門講座(2)

期日 8月8・9日

講師 戸田健夫氏
定員 30名

洋画入門講座(2)

期日 8月24・25日
9月7・8日

講師 根岸茂行氏
定員 30名

期日 8月10日

ごあんない・実技講座

60年度事業案内 ②

普及事業

美術講演会

特別展に関連して、本年度2回実施する。

期日 (1) 5月26日(日)
(2) 9月1日(日)

美術を語る会

美術一般に関するテーマで、より一層の理解と関心を深めるため定期的に実施する。

期日 (1) 6月8日(土)
(2) 9月14日(土)
(3) 9月28日(土)
(4) 11月30日(土)
(5) 2月1日(土)

美術館夏季大学

美術に親しみながら知識や理解を深め、その魅力に触れる。

実技講座

期日 7月26日・27日

入門講座

日本画・デッサン・洋画・版画・彫塑・七宝焼・陶芸・金工・書芸・てん刻

研修講座

日本画・洋画・陶芸・書芸・てん刻(各3日・7日間)

実技講座の受講を希望される方は往復はがきに希望講座名住所・氏名・年令・電話番号を記入のうえ、学芸課普及班までお申し込み下さい。

特別展入場料の免除対象

六月十五日(千葉県民の日)及び六十五才以上の者、身体障害者(介護者を含む)又は精神薄弱者の方は入場料が免除されます。

職員異動

昭和60年4月1日付けで次の職員が異動しました。

退職者

内野 泉(学芸員)

転出者

森田 保(主査↓教育庁文化課主査兼文化振興係長)

加曾利和夫(副主査↓千葉市立高洲第二中学校教頭)

前川公秀(学芸員↓教育庁文化課文化施設係文化芸員↓学芸員)

日誌抄

12・20 美術館協議会
1・19 特別展「速水御舟とその時代展」(2月27日まで)

2・2 第一回現代日本具象彫刻展オープン・授賞式(2月24日まで)

2・9 第二回美術を語る会(講師佐藤信夫氏)

2・21 美術館協議会
2・23 第三回美術を語る会(講師鈴木徹氏)

4・1 辞令交付

財主事
忍足正雄(副主査↓印旛沼下水道事務所副主査)

転入者

高村照夫(千葉市立みつわ台中学校教諭↓副主査)

田坂 浩(県文化財センター文化財主事↓文化財主事)

岩瀬隆司(千葉港湾事務所主任技師↓主任技師)

相川順子(県立上総博物館学芸員↓学芸員)

財主事

財主事

財主事

財主事